

流罪の汚名と戦った会津藩の人々の物語

藩主も含め旧会津藩の幹部たちの足跡を辿っていく

村木 哲

星亮一著

▶ 会津藩流罪

故郷を追われた難民からの再出発 復旧、復興に六十年
5・25刊 四六判278頁 本体2000円
批評社



著者は、これまで幕末期から明治期にかけての会津藩関連の著書を数多く出してきた。だが最新刊の本書には、薩長政権下、朝敵という烙印を捺された会津藩の人々、一万数千人の旧南部藩の領地や北海道への強制移住を、生活のあてもない難民として捉え、福島県発事故で故郷を追われた現在の福島の人たちの姿と重ねあわせながら、「流罪の汚名と戦った会津藩の人々の物語」を著わしたと述べている。

幕末期、藩主・松平容保が京都守護職にありながら、一転、朝敵となってしまう会津藩は、白虎隊の悲劇に象徴されるように、わたしたちにとって必ずしも逆賊のイメージはない。それは、かつての歴史教科書の記述や司馬史観の

ように、明治維新を過大に評価した。会津藩には援軍がなく孤立無援の戦いを強いられ歴史認識は、たとえ見做されるようになったからだ。例えば新撰組への評価にしても、昭和期に入ってから説き及ぶようになっていったように、北海道は未開の地で、戦争で動き手を失った会津人が開拓などできる場所ではなかった。そこに会津人を送りこいた政治的権力が開拓から薩長へ移行しただけで、維新でも革命でも何でもなかったという

結尾 北海道行は中止になり、南部藩の一部、下北半島を中心とする陸奥の地に三万石の領地があったといわれること)になる。ここで旧会津藩は、斗南藩として一八七〇年一月に再興を期するも、一八七一年の廢藩置縣政策によって斗南県となり、同年、弘前県や八戸県などとの合併により青森県に編入され、会津共同体は再び離散・解体を余儀なくされる。

著者は、これまで幕末期から明治期にかけての会津藩関連の著書を数多く出してきた。だが最新刊の本書には、薩長政権下、朝敵という烙印を捺された会津藩の人々、一万数千人の旧南部藩の領地や北海道への強制移住を、生活のあてもない難民として捉え、福島県発事故で故郷を追われた現在の福島の人たちの姿と重ねあわせながら、「流罪の汚名と戦った会津藩の人々の物語」を著わしたと述べている。

天皇の信託が厚かった容保、その意に背き「倒幕運動を起した」薩長によって朝敵とされたのは、歴史的矛盾を体现した犠牲者といってもいい。会津藩が一月月の籠城戦の後、降伏に追い込まれたのは、明治元年(一八六八)九月二十一日であった。会津城下の戦いは惨憺たるもので

川と永岡は東京へ向かう。著者は、楳原に対しては特別の視線を送っている。なぜか、その後の会津史から、その名前が抹消されていたからである。楳原の最期の場所は北海道・根室の地であった。

「明治二十二年(昭) 楳原平馬は急な病で淋し息を引き取った。享年四十七だった。根室の厳しい気候が平馬を蝕んで行ったのかも知れない」永岡は「会津人を北海道や下北などの不毛な地に追いやって張本人」の「木戸孝允に激しい敵愾心を抱き、政府転覆を計画するも失敗し、獄死する。山川は陸軍少将、貴族院議員を歴任、明治三十一年に亡くなる。五十二歳だった。山川の弟・健次郎は初代東京帝国大学総長となり、妹・捨松は、「鹿鳴館の華と謳われ、津田梅子も開いた津田英語塾にも全體會員だった。また、陸軍大臣、薩摩出身の大

(評論家)